

祝 辞

日本農薬学会の発足にあたって

文部大臣 永 井 道 雄

関係研究者の方々の多年にわたるご努力が実り、ここに日本農薬学会の発足のはこびとなりましたことを心からお祝い申し上げます。

戦後、急速に開発され、普及された農薬が、わが国の農業生産の増収と省力化にきわめて大きな役割をはたしたことはよく知られていることです。先のエネルギー・ショック以来、世人の関心はこのエネルギー資源それに食糧の涸渇の恐怖に向けられています。その中の食糧について、今後の世界人口の増加に対応し、必要量を確保するためには、全地球的な生産力の増強と管理が必要とされ、とくに化学肥料、生産技術の改良、開発、それに農薬の全面的な研究開発を急務としています。

しかしながら、農薬は農業生産に優れた特性を発揮する反面、農薬の食品への残留、自然環境の汚染、生態系への影響等の問題をつねにはらみ、それだけに農薬についての慎重な科学的評価と安全性に人々は大きな望みをいだいております。このようなときに、農薬について広い立場から、科学的・総合的に研究を展開しようとする本学会の設立をみたことは、まことに時宜にかなったことと思われま

す。設立趣意書には、農薬学の総合的進歩発展および安全かつ効果的な農薬の開発を図るとともに、広く生命科学および環境科学の発展に寄与することを学会の目的とし、研究にあたっては、生理活性物質の構造と活性、作用機構、新農薬のデザイン、合成、製剤分析さらに農薬の安全性、とくに環境や生体内における代謝、分解、残留や毒性など農薬に関する総合的な研究を行なうとあります。私はこのご趣旨に敬意を表するものであります。

このうちでとくに注目したいことは、生物体は複雑多岐な体制をもちながら高度な秩序性をもつ特異な物質系であり、環境と微妙に調和し適応するものであり、農薬はこの生物体に作用し、特定の代謝系を選択的に駆除しようとするものだけに、農薬の開発には、広い分野の総合的観点からの慎重な展開が必要だと思われることです。

生命現象の諸システムがまだ十分明らかでない現在、農薬研究の前途はけっして平坦ではないと思います。そうであるだけに、農薬研究は生命現象解明の新たな道具として新しいアプローチをもたらす可能性も期待され、そのような発展の方向も大事にしなければなりません。

最後に農薬研究は化学・薬学のみならず、生物学・農学・医学・生化学等の研究者による緊密かつ総合的な研究の展開をはかり、試行錯誤を重ねながら、慎重に、しかも根気よく進められるものでありますが、私は本会がそのような精神をもって、大きな成果をあげられることを期待しております。